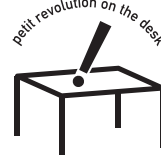


机の上の小さな変革



そもそもの反復

何かについて深く考えることというのは、一般的にとっても難しいことだと思われています。しかし、あるプロセスを辿ることで、その辺りをうまく行なうことができます。

今回はそのプロセスを、みなさんと一緒にやってみたいと思います。早速、どんな単純なことでもいいので考えるテーマを決めましょう。私は、「傘をさす」ということについて考えてみたいと思います。みなさんも気軽に決めてみてください。

/// ☂ /// ☂ /// ☂ ///

ではまずみなさんには、頭に「そもそも」という言葉を付けて自分に質問をしてみてください。私の場合だと「そもそも傘をさすのはなぜですか?」という感じです。

このような問いかけをしてみると、「雨を防ぐためです」など、簡単に答えが出ると思います。それでは次に、たとえば「そもそも雨を防ぎたいのはなぜですか?」というように、いまの答えにもう一度「そもそも」を付けて自分に質問してみましょう。

すると今度はまた、「濡れたくないからです」と答えがスッと出ると思うので、同じように何度も「そもそも」を使って問いを繰り返します。たとえば「それは濡れると不快になるからです」「ではなぜそもそも濡れると不快なの?」「衣服が貼りつくからです」といった感じで、3〜4回質問を繰り返してみてください。

掘り起こして核を取り出す

先の例では、どのような動機で「傘をさす」のかを深掘りしていましたが、聞き方によっては、別の掘り方もできます。たとえば「そもそも傘をさすってどんな状態?」「雨を防いでいる状態」「そもそも雨を防いでいるってどういう状態?」「濡れない状態」「そもそも濡れないってどういう状態?」「乾燥を維持している状態」といった感じです。

このように、動機や状態、動作など様々な軸で問いをつくり「そもそもそれって何?」と繰り返し聞くことで、強引に核になっている概念のようなものを取り出すことができます。それを元にテーマを捉え直すと、新しい可能性が見えてきます。たとえば傘を深掘りした結果「乾燥状態を維持するためにはどうすればいい?」といった問いをつくり、それに答えようとする中で、従来の傘とはまったく異なる「超速乾性の衣服」や「屋根の下ですべての移動ルートを検索する方法」が新しい傘として提案できるかもしれません。問題の枠組み自体を捉え直せれば、根本的に異質なイノベーションにつながる新しいアイデアを考えることができます。

深く考えることや、新しい着眼点を手に入れることは、難しいことではありません。質問によって本質を捉え直す思考技術を身につけることで、それらは可能になるのです。



PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科専任講師。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。